京都市学校歴史博物館だより

VOL. 18

平成20年9月発行

正門，石塀は，国登録文化財

開館10周年記念特別展

松園・松篁・淳之　～芸術家を育んだ京の町～

このたび，開館10周年を記念して，上村松園・松篁・淳之と三代に亘って京都に生まれ京都に深く関わってきた芸術家をとりあげる展覧会を開催します。上村松園は，現在は京都市学校歴史博物館となった開智小学校から京都府画学校へすすみました。上村松篁は初音尋常小学校を卒業，京都市立美術工芸学校，市立絵画専門学校へすすみ，市立美術工芸学校講師から京都市立美術大学教授，名誉教授となりました。上村淳之は竹間尋常高等小学校に通い，京都市立美術大学専攻科修了後，京都市立芸術大学教授，副学長をつとめました。三人の芸術家の作品世界を鑑賞していただくとともに彼らを育んだ京都の学校や京都の町を感じていただきたいと思います。

大正７年松園から開智校へ寄附，その後協議の上，開智校で松園の先生であった中島真義氏に売却され，ご遺族に大切に保存されてきた『古代舞姫図』や，松篁が使った小学校の教科書など，初公開の作品や資料も含んだ数々の展示品をご覧下さい。

学芸員　秋山美津子

古代舞姫図（部分）
上村松園
中島才二蔵

●開催期間
10月３日(金)
～12月15日(月)

●記念対談
上村淳之×
加藤類子
（元 京都国立近代美術館主任研究官・元 池坊短期大学教授）
10月25日(土)

夕ぐれ　上村松園
大松美術館蔵

雪椿　上村淳之　京都花鳥館蔵

暖日　上村松篁　京セラ美術館蔵

～開館10周年記念特別展に寄せて～

館長　上村　淳之

祖母松園の学舎に，私が館長を勤めているのも不思議な御縁かと思うし，ここで三代展が開かれるのは嬉しい限りである。

浮世絵を源に発展してきた当時の人物画を描いた松園，写実を基本にと明治維新の教育方針の中で育てられた父松篁，西洋の思考方向を主流に教育された時代の芸大に籍を置いた私。三人三様の途を歩んできた。

三代の血縁に流れるDNAを否定するわけではないし，結果として顕れる血の濃さに，逆に驚いている。祖母松園は，私が画の道を選んだ事は知らないし，父は大学以外では，私の仕事には一言も触れる事はなかった。

個々は独立した存在でなければならない。個性の伸長の或いは妨げになるかも知れないと思ったのかも知れない。私自身も芸大入学時から父のもとを離れ，奈良にアトリエを構えたし，逆に父が写生に訪れ，長逗留する事もしばしばであった。その頃から，少しずつ父の絵の空間に描きこまれる世界がより実在感の濃いものとなっていったように思う。

私は赤い花桃と五色セイガイインコを描きたいと思うが，"白花で描いてみないか。"と私に競作を提案した事があった。双方とも出来ず仕舞ではあるが，私に様々な宿題を残していった。アトリエの庭を歩きながらここに松園が佇んで矢立から取り出した筆で梅を写生しているような錯覚を覚えたり，こんな花が咲いていると父に知らせてあげようと思ったりする。

各々が独自の世界を持ち，又持とうとして進めてきた仕事ではあるが，底流に在る共通項を否定するわけには行かぬようである。

開館十周年記念展

なぜ？ なに？ 学校歴史博物館

～10年間のご質問に一度にお答えします～

開催期間；平成20年7月11日（金）～9月29日（月）

京都市学校歴史博物館は，今年開館10周年を迎えます。おかげさまで市民の方はもとより，遠方からも来館していただける博物館に成長いたしました。開館から今日まで，「学校」に関する多くのご質問をお寄せいただき，この節目にあたって，ご質問への回答やアンケート記録をベースに，学校の雑学をご覧いただける展覧会を企画いたしました。

企画展の内容は11コーナーに別れています。小学校時代の身近なものとして「ランドセル」「児童の机と腰掛」「夏休みの宿題」「通信簿」そして「音楽」「算数」の変遷。これら明治から最近までの実物をズラッと並べてみました。

それぞれに簡単な歴史を紹介していますが，見られるかた一人ひとりの懐かしい思い出が甦ってくるのではないでしょうか。昭和20（1945）年の出来事「学童集団疎開」と「墨塗り教科書」は以前から数度展示しておりますが，新たに収集した資料だけで構成しています。なぜ教科書に墨を塗ったのか，語り継いでいただければと思います。

「布と革製ランドセル」昭和30年代
カザマランドセル蔵

「明治から昭和の児童机と
腰掛の展示風景」

「校舎のリサイクル」では，下京区の元修徳小学校の鬼瓦が兵庫県篠山市から80年ぶりに里帰りしました。

「運動会・陸上大会」では，かつて"走りの崇仁"と全国に名を馳せた京都市立崇仁小学校の陸上部ユニフォームを展示しています。

「京都市立小学校の校歌」では，全小学校の校歌の楽譜と歌詞を集めて展示していますので，明治のペーパーオルガンの伴奏で久しぶりに母校の校歌を歌ってみてはいかがでしょうか。小学校の話題は家族共通の思い出話となります。その機会をご提供できれば幸いです。

学芸員　竹村佳子

唱歌・童謡教室

～学校歴史博物館体験事業より～

学校歴史博物館で一番人気の唱歌・童謡教室は，春・秋・冬の年3クール，5回に渡って四季折々の季節に添った懐かしい唱歌・童謡をみんなで楽しく歌っています。

講師の元京都市少年合唱団指導者 森冨美子先生に歌う楽しさ・喜びを教えていただき感動をみんなで分かち合っています。

大正期の懐かしいオルガンを伴奏に「ふるさと」「十五夜お月さん」「赤とんぼ」などを口ずさめば，あの頃にタイムスリップできるそんな心あたたまる教室です。

トラフィカ京カード 発売中！

平成20年
9月発売！

「紫式部之図」
勝田哲

平成20年度発売分デザイン

- 「北山台杉」武藤彰（発売済み）
- 「京百景　清水寺」徳力富吉郎（12月発売）
- 「桜」勝田幸男（3月発売）

今年度も，京都市立学校所蔵の名品が，トラフィカ京カード（京都市バス・京都市営地下鉄乗車券）のデザインに採用されました。

市バス，地下鉄とも全車両，全路線でご利用になれます。

企画展
開催報告

『京都盲唖院』発！

障害のある子どもたちの教育の源流

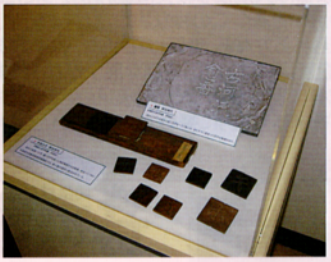
開催期間；平成20年1月18日（金）～4月14日（月）

上京十九区小学校の教師だった古河太四郎が，京都に，日本初の障害のある子どもたちのための学校「盲唖院」を開学させたのは，明治11(1878)年でした。それは，障害のある子どもたちにも均しく教育を，と願う教育者や地域の人々，障害児やその家族の信念や尽力によるものでした。

今回の企画展では，古河たち教師により開発，製作された，明治期の盲唖院で実際使用された教具や生徒作品を中心に，京都府立盲学校，京都府立聾学校よりお借りして展示しました。

視覚障害児教育に関しては，聴覚障害児への地理教育にも使用されたであろう「凸形地球儀」，「凸形京町図」。文字の形を認識させる為の教具，「木刻凸字」などを展示しました。聴覚障害児教育に関しては，古河が考案した指文字の一種での計算方法を示した「手算法図」，発音指導の為の「発音起源図」などの掛図や，児玉兌三郎の「京都市立盲唖院之図」などの生徒作品を展示しました。

また，展示物をより深く理解していただくため，視覚障害のある方にも展示物に触れて体感していただける機会を設けるため，「展示物をさわれる日」を期間中4日間設けました。当日は「凸地図」や「木刻凸字」などの盲唖院の教具や，当館所蔵の，大正・昭和時代に京都市内小学校で使用された教具など，計25点を触って頂きました。視覚障害のある方はもちろん，健常者の方も，目を閉じ，触覚の世界を体験することで大変喜んで頂けました。



学芸員　横尾澄子

京都の"点字力"に触れる～企画展「障害のある子どもたちの教育の源流」に寄せて～

国立民族学博物館・准教授　広瀬 浩二郎

来年は点字の考案者，ルイ・ブライユの生誕200年である。各国で記念行事が計画されている。僕自身，学校歴史博物館の盲唖院展からアイディアをお借りしつつ，「点字の展示」を具体化すべく準備を進めている。点字は視覚障害者が簡便に読み書きできる究極の触覚文字だが，その特徴は常識にとらわれない柔軟な発想力，少ない材料から多くを生み出すしたたかな創造力にある。僕はこの二特徴を〈点字力〉と名づけ，混迷する現代教育を問い直すキーワードにしたいと考えている。日本点字が制定されたのは1890年だが，それ以前の盲教育はどのようなものだったのか。そんな近代障害児教育の源流を豊富な史資料で跡付けたのが，学校歴史博物館の企画展だった。本展は，これまで一般に知られていなかった盲・聾学校の教具を紹介した点において，画期的な展覧会だった。また本展では，視覚障害を持つ来館者を意識した試みとして，さわれる展示品を選定し，会期中の四日間，展示物に自由にさわれるコーナーが開設された。限られた予算，人員の中で「だれもが楽しめる展覧会」を模索したスタッフの〈点字力〉に敬意を表したい。

本展を通じて，僕は日本の障害児教育のルーツにある〈点字力〉の奥深さを確認し，その〈点字力〉を育んだ京都の伝統を知った。コンピュータの導入で日々進歩する現在の視聴覚障害児教育に比べると，盲唖院で行なわれていた教育は不十分なもので，苦労も多かったろう。しかし不十分さ，苦労以上に，独創的教具を工夫した教師，それらを作り上げた職人，少ない教材で懸命に学んだ生徒の情熱を積極的に評価したい。今回の企画展は盲唖院に集う京都人の〈点字力〉を宣伝する啓発的な展覧会として有意義だった。明治の〈点字力〉が，どのような形で現代に継承されているのか。次回は21世紀の特別支援教育のあり方を探る意味で，今日の盲・聾学校の状況を解説する刺激的な展覧会を企画してほしい。

（＊広瀬氏には，本企画展の展示方法について助言をいただきました。）

ボランティア市民学芸員の声

市民学芸員として思うこと

伊豆田　眞一

博物館の常設展示を見て感じる事が，2点あります。1つは平安時代から共同して町を作り上げてきた京都の町衆の意向が，連綿と受け継がれ，これが明治2年の番組小学校の創設に繋がっている点。もう1点は地域を愛する心から，多くの人達がいろんな品物を学校に寄贈され，これが学校の宝物として残ってきた事です。

展示の中でも明治以降の教育の流れ，特に戦中・戦後の大きな教育の変遷は，当時の教育を受けた者としては，身につまされるものがあります。

京都は大規模な戦災に遭わなかったため，昔の物の展示も多く，この様な施設は珍しいと他府県から来られる方々と，昔話に花が咲く事もよくあります。

企画展では，毎回多様な展示がなされますが，来館者に喜んでいただける様，私自身今後もいろんな事を学び，案内に努めてまいりたいと思います。

十周年に寄せて

志水　望子

約20年前に開智小学校の近くに越してきた私は，よく学校の前を通りました。選挙の際には雨天体操場（現常設展示室）が投票所になっていました。小学校統廃合の際には，我が家にも，統合後の開智小学校の活用についてのアンケートが配られ，私は「人々が集う場所」と回答をしたように思います。学校歴史博物館の門をくぐる度にその頃のことを懐かしく思い出します。当時の私は，京都の小学校がどのようにして誕生し，どのような思いで育まれたのか知らず，市民学芸員になって初めて，多くのことを勉強させていただきました。

当博物館は，この10年間に，展示室も展示内容も益々充実し，新設されたコーナーで紹介されている元小学校の建物を確かめたくて，先だっては鎌倉へ。市民学芸員であることで，私は活力を得て，来館された方々に語り継ぐ喜びを得ています。これからも研鑽を深めて，お役に立っていきたいと思います。

昔の学校あれこれ　第十一回

遠足

かつて「遠足」は近隣学校合同運動会参加のため，その会場（神社境内・川原等）まで往復し，遊戯や体操を行って帰校する「遠足運動会」が主流でした。京都では円山音楽堂のある真葛ヶ原（まくずがはら）や下鴨の糺（ただす）の森へ行っていたようです。日帰りの「郊外学習」という今日的な意味を持つようになったのは各学校に運動場が整備されつつあった明治後半になってからで，明治26年には京都市動物園が開園したため当時はここを遠足場所に選ぶ学校が多くありました。

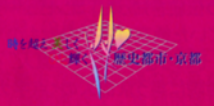
大正時代には郊外学習より心身鍛錬・団体行動訓練等が重要視され始め，桃山御陵などへも歩いて行っています。昭和初期には遠足のことを正式には「郊外（校外）教授」（見学や修学旅行も含む）と呼んで毎月実施，その行き先も鞍馬寺・岩屋寺・兵営見学などと時代を反映しています。戦争で中断した後，昭和35年頃からは貸切のバス遠足が増え，また，少子化の現在では，自然や歴史にふれながら，異年齢集団での活動を経験させるため「たてわり遠足」で嵯峨野でのグループラリーなども行われています。

「日彰尋常小学校遠足風景」 大正期　元京都市立日彰小学校蔵

京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町仏光寺下ル橋町437（元開智小学校）
TEL. 075-344-1305 FAX. 075-344-1327

●入館料/大人200円　子ども（高校生以下）100円
（20名以上の団体/大人160円　子ども80円）
※京都市内の小・中学生は土・日は無料
●開館時間/9：00～17：00（入館は16：30まで）
●休館日/水曜日（休日の場合は翌日）
12月28日～1月4日



●阪急電車/「河原町」駅下車　南西へ歩5分
●地下鉄/烏丸線「四条」駅下車　南口改札東へ歩10分
●市バス/「四条河原町」停下車　河原町通より西へ二筋目（御幸町通）より南へ歩5分